平成２７年度第２回　伊那市総合教育会議会議録

◎招集年月日　平成２７年８月１３日（木）
◎開催日時　　平成２７年８月１８日（火）　午後３時３０分～５時
◎場　　所　　伊那市役所　庁議室
◎出 席 者　　白鳥市長、松田教育委員長、宮脇教育委員長職務代理者、平澤教育委員、田畑教育委員
◎欠 席 者　　なし
◎出席職員　　北原教育長、大住教育次長、北野学校教育課長、小松生涯学習課長，捧文化振興課長、酒井スポーツ振興課長、森田高遠長谷教育振興課長、中村指導主事、唐木指導主事、山崎教育総務係長

１　開　　会

大住教育次長

皆さん、こんにちは。定刻となりましたので、ただ今から第２回の総合教育会議を開催させていただきます。初めに白鳥市長からごあいさつをお願いいたします。

２　市長あいさつ

白鳥市長

お盆も終わりましてぐっと涼しさも見えたかなという季節になりました。これから８月下旬にかけながら、夏休みが終わって子どもたちが登校するようになるわけですが、夏休み期間中、大きな事故とかなかったようですので、一安心しているところです。今日は総合教育会議という中で、伊那市としても特段に力を入れております「暮らしのなかの食」をテーマにしながら、今の様子、それから確認をしたいのは、「暮らしのなかの食」とはどういう意味を持って今実行されているのかといったことも、会議の中で出していただければと思う訳であります。今日も保育園の保育料の関係の諮問・答申がありまして、いくつか話をしたんですけれども、評価としまして伊那市の保育内容、高い内容でされていると。ただ、それだけでなく中身が大事だよと言われました。まさにその通りだと思いますし、その保育で学んだこと、培ったことが今度は小学校に来て、また、中学校に行くということであります。医食同源という言葉もありますけれど、食というのはどんなに私たちの体、また、健康のためにも大事かということを含めてご議論いただければと思います。簡単ですけれどもあいさつとさせていただきます。

大住教育次長

ありがとうございました。続きまして、松田教育委員長からごあいさつをお願いいたします。

３　教育委員長あいさつ

松田教育委員長

市長さんから夏休みの話が出ましたけれど、夏休みの恒例となっております「おいで塾」ですが、各館とも充実した「おいで塾」ができまして、ますます定着してきているなあと思います。私は長谷の公民館の「おいで塾」に参加させてもらいましたけれど、長谷の子どもたちは７４名ですけれど、そのうち６３名参加するという盛況ぶ

りでした。また、高遠高校の高校生がボランティアで参加してくれましたけど、１時間の座禅指導は高校生がやってくれまして、大変充実した座禅会になりましたけれど、高校生も大変よかったという反省を残して帰っていただきました。また、各教育委員の皆さんにおいては、成人式に参加していただきましたけれど、私は西春近の成人式に参加させていただきましたが、大変新成人の皆さんのあいさつが立派で、成長しているなあという感想を持ちました。みな、将来、伊那市に帰って来たいという感想が多く出されていまして、伊那市が求めているそうした願いが若い人のなかにも定着してきているんじゃないかという感想を持ちました。今日は市長さんお話しのように、伊那市の教育が最も大事にしているところの「暮らしのなかの食」について重点的に意見交換させていただくわけですけれども、先刻、内山節先生がお越しくださいまして、実際に子どもたちの活躍している場所を見ていただきご指導していただきましたので、この内山先生の教えに学ぶということをこの会で　　大事に話し合いができたらいいなと思いますので、よろしくお願いします。

大住教育次長
　ありがとうございました。続いて協議事項に入りますが、こちらの進行は市長の方でお願いいたします。

４　協議事項
白鳥市長
　それでは、「暮らしのなかの食」の取り組みについてということでありまして、まず、この状況について報告してもらうということでよろしいですか。

（１）伊那市学校給食食農体験事業「暮らしのなかの食」の取組みについて
北野学校教育課長
　それではお願いいたします。本日ご提示してあります資料に基づき、説明を簡単にさせていただきたいと思います。まず、「暮らしのなかの食」の実施計画ということで、本年度各校の予定が記載されたもの。これにつきましては既に教育委員の皆さんには配布させていただいております。また、右肩の資料ナンバー１の１でございますが、６月の各校の畑の様子ということで準備をさせていただきました。この中で、特徴的な部分では、１ページ目、伊那東小、花壇だったところを畑にしております。昨年はナスを作っていましたが、今年度はパプリカで彩りを添えているということでございます。また、地域の方を講師に招きましてコミュニティスクールとして位置づけ試行を行っているところでございます。おめくりいただきまして２ページ目、伊那西小でございますが、地域性を活かした牧場との交流、１、２年生がチーズ作り、３、４年生が農家との交流、５、６年生はリンゴ畑がありますので、この交流を図りながら食農体験を行っていくところでございます。ちなみに伊那東小につきましては１１月の発表会、交流会におきまして発表校に指定しております。また、３ページ目の一番下、東春近小学校につきましても、発表校ということで準備をいただいているところでございます。おめくりいただきまして４ページ、西箕輪小学校でありますが、こちらにつきましては、秋以降６年生が羽広カブの栽培を希望しているということで準備を進めていると聞いております。また、５ページ高遠小につきましては、指導者として上農の元校長先生、田んぼの関係ではＪＡの青年部、こちらと連携して作付を行っているということでございます。その下の高遠北小学校、やはり発表校を予定して

おりますが、「高遠北小学校と言ったら高遠そば」を掲げまして、高遠そばの材料となる味噌の原料の大豆を１、２年、辛味大根を３、４年、５、６年が内藤トウガラシとそばを栽培するということで、学年ごとに計画を実施しているという状況でございます。中学につきましては伊那中、今回初めて校舎南の荒れ地を畑として開墾したという状況がございます。また、最後のページ８ページになりますが、長谷中につきましては、葉物野菜を本格的に扱っている、長谷中独自の取り組みを展開しているところでございます。大変雑駁でございますが、６月から７月にかけての状況でございます。ご紹介させていただきました。また、資料ナンバー１－２、こちらにつきましては、「内山節先生との懇談から」ということでお示しをしてございます。さる７月９日に各学校を視察いただきまして、そのあと伊那東小におきまして教育委員さん、校長先生方ご出席いただきまして懇談した内容でございます。これについて、特徴的なところをコメントさせていただこうと思ったんですが、本日松田委員長さんの方からこれに特化した資料を２種類、信毎さんの新聞記事を含めてご用意いただておりますので、こちらの方で触れていただきたいと思います。資料の内容、取組みの概要につきまして以上であります。

白鳥市長
　松田先生の方から内山先生の懇談の中身をよろしくお願いいたします。

松田教育委員長
　市長さんの話の中でこの「暮らしのなかの食」は、どういう意味を持って実践していくのか、そういうことについて具体的に考えていく必要があるんじゃないかということをおっしゃられましたので、それに関わると思いますので、お願いしたいと思いますが、大きく２つ内山先生の方からご指摘いただいたことについて取り上げてみました。「学校はみんなで創る空間である。生徒、先生だけでなく、地域、父兄も創る。先生が創って生徒は覚えるという関係から、お互いに創りあう関係をどう創るのか。自分たちで作って食べるというのは、」ここからが大事なんですが、「これからの学校のあり方への問題提起をしている。」という指摘であります。
　この「これからの学校のあり方への問題提起をしている。」ことについて、３つ考えてみました。
　そのひとつは「子どもが学ぶ」ということへの問題提起であります。これは信州教育のひとつを拓きました淀川茂重先生、最後は弥生ヶ丘高校の校長先生をされて退職されておりますけど、この先生の「途上」の中に書かれているんですが、『児童の教育は、児童にたちかえり児童によって児童のうちに建設されなくてならない。そとからではない。うちからである。児童のうちから構成されるべきものである。（中略）教育は児童の生活をよそにしてくわだてられるべきではない。児童の生活に、もとむるこころを、それを中心にしてそこに構成され創造されていくべきものである。』こういう教えなんですけれど、この教育観は伊那市の教育の大事な考えにもなっているところですけど、このことを背景に持ちながら実際の「暮らしのなかの食」を見てみますと、先程課長の方から示されたように資料１－１にありますように、生産している農作物に各学校それぞれの特色がある。２１校が一律ではありません。それは、子どもたちの願いや、求めが大切にされている。また、学校の置かれている地域性が反映されている証であると考えたいと思います。このことは、教科目、内容が定められた教師主導の学びから、子どもが学びを選択し、自ら追究していく学びを拓くことで

ありまして、伊那市の教育が大事にしてきていることが、この「暮らしのなかの食」を通して更に深化したと考えたいと思います。ただ、「暮らしのなかの食」によって、子どもたちの中にどのような追究活動、つまり、学びの質の高まりが見えてきたのかについて、十分な検証がなされないと教育活動として弱いものになってしまうと思います。各学校、或いは、各学級の取組みの実践の記録とその考察が大切になる。このことがこれから求められていると思います。

２つ目は、教師の姿勢への問題提起をしていると思います。これは伊那小の教育理論を支えられた三枝孝弘先生の教えですけれど、『ものやことを教えこむものとしてでなく、教えるとおもわされている子どもから、逆に、枯渇しそうになっている自分に生命、繊細さとか、微妙さとか、新鮮さ。そういうものが付与されるというふしぎな存在関係、そういう関係が教師と子どもの関係である。』という教えであります。で、子どもは大人と別の世界に住んでいて、自然と感合し、一体となっているところがあります。その感性の鋭さ、或いは、豊かさから、大人がハッとする気づき、気づきは「覚」「悟」「乾かない心」と訳していいと思うんですけど、を発することがしばしばであります。この子どもの気づきを広げ、深めることができなければ、内山先生の指摘される「先生が創って生徒は覚えるという関係」から脱することはできないというふうに思います。「暮らしのなかの食」の教育活動は、教師の弛まない研究と修養が必要となる教育活動であると思います。先生方の研究と修養に対する教育委員会としての支援が大切になると思います。

３つ目は、「地域、父兄も創る」ことの再生への問題提起であります。長野県が「信州教育」或いは、「教育県長野」と称えられるのは、『教育を重んじ向学心に富む県民、伊那市民の気風があり、「子どもの為なら、学校の為なら」という熱い心情の教師に対する期待と、敬意の念』があったからであるというふうに思います。この気風は、声を掛ければ、快く子どもたちの活動に参画してくれたり、支援してくれる市民の姿となって伊那市の今日にあると思います。「暮らしのなかの食」を「信州型コミュニティ・スクール」の中核的内容にしていくことによって、市民の参画した教育活動として、伊那市の教育の特色が更に深められると考えます。『暮らしのなかの食・信州型コミュニティ・スクール』のモデル校を設置して、活動の具体を発信できたらというふうに考えます。

この、「これからの学校のあり方について問題提起をしている」ことについて、３つにまとめてみましたが、意見交換をしていただければと思います。

白鳥市長

はい、ありがとうございました。最初に、この写真でありますけど、本当によく手入れがされているなあという感じがします。現場に行ってないので、伊那東小学校の最初の場面しか思い浮かばないんですが、西箕輪小学校あたりはプロですよね。近所のお百姓さんが一緒にやってくれたと思うんですけど、ものを育てるっていうのは本当に難しいと思うんですが、そうした失敗があって段々にできてくるんで、いきなり最初からうまくいくっていうこともないんでしょうけど、それがまた大事なことかなと思いますので、毎年毎年成長しながらやっていくことが重要じゃないかと思います。それでは、今、松田先生の方から内山節先生の指導に学んだ（１）の「これからの学校のあり方への問題提起をしている」について、ご意見をいただければと思います。そのあとに（２）のテーマとして、「人間が根本的なものを考えると農業につながる」に進めて参りたいと思いますので、まず、（１）のところ、また、最初の各学校の取

組みの様子についてお話をお伺いできたらと思いますがいかがでしょうか。まず夏休みに学校の子どもたちがどういった手入れをしていたかというようなところはどうでしょうか。情報はありますか。毎日学校に行っている子どもたちはいいんでしょうけど。

田畑教育委員
　たまたま伊那東小学校の学区内に自宅がありまして、２年生がお世話になっているんですけど、毎朝、お盆中はお休みなんですけど、ラジオ体操のある時に、子どもたちが朝６時半から始まるのでわーっと家から出てきて、公民館でやるんですけど、行きはラジオ体操に夢中で出かけるんですけど、帰りは何人かでわーっと帰ってくる流れの中で、たまたま畑が隣なもんですから、ラジオ体操のカードをぶら下げたまま畑の中に入って行って、「こんなんできてる。あんなんできてる。」って、朝のすがすがしい時間に、朝の植物の状態を見るっていうのが、子どもたちのなかで興味を持って取り組まれているのを、微笑ましく見させていただいておりまして、あまりきれいな川ではないんですが、左右に川が流れておりまして、その辺に落ちている空き缶だとかペットボトルを持ってきて、それで、多分自分のクラスのものが気になるんでしょうけど、それで水をかけている。非常に微笑ましいシーンなんですよ。

白鳥市長
　いいね。どうですか。学校の様子とか分かったら。

中村指導主事
　富県小学校あたりですと、例年夏休み中は草だらけになっちゃって、先生方が取るのが大変なんですけど、今年ＰＴＡにお願いをして、「学校に来た時に一緒に来ていただいて、収穫と草取りもちょっとしていただけますか。」と、その関係で来ていただいた時にその都度その都度、２～３組の保護者とお子さんが来て、草を取ったり収穫したりということで、その時に普段だと親子の会話がないなかで、会話をしながらできたという声が上がっております。

白鳥市長
　ほかの学校はどうですか。情報としてあれば。

北野学校教育課長
　高遠北小あたりでは、夏休み中にプールに来るわけですが、そこのところでいわゆる水慣れの時間を若干見直しまして、５分程度ではありますが、水やりですとか草取りの時間を設けていると、夏休み中であっても日常的に関わるというところを大切にしているということであります。

松田教育委員長
　長谷小はですね、うちの近くですのでよく目に入るんですけど、バラバラなんですよね。よく手の入っている草のない畑とちょっと何とかした方がいいんじゃないっていう畑と、私はこの不統一がですね、一斉にやってきれいになっているっていうのも教師主導でやっているっていうことになるんですが、子ども達主導で一生懸命自分たちの畑をやろうということになると、それは子どもたちにとってひとつの仕事になっ

ていくので、そういうふうになっていくところと、まだ、そこまで行かないで、手をこまねいているというか、心の中から自分たちの畑が見えていないというかですね。そういうバラバラ性が子どもたちがお互い刺激し合って、畑というものに対する意識が高まっていくので、あまり整えすぎない方がいいと長谷小の畑から思いますね。それが結局子どもが学ぶということにつながると思うんですね。

白鳥市長
　確かにどこの畑にも草１本ないというのも、子どもたちがやっているとは思えないですよね。

田畑教育委員
　結構東小は盛っています。

白鳥市長
　消毒はやっていないのかな。

田畑教育委員
　やっていないんじゃないでしょうか。各クラスごとに自分たちの看板を作ってあって、楽しんで、場所も自分たちで守っていくような意識も持っていると思います。

白鳥市長
　農業は基本的には１年に１回だからね。コメ作り５０年って言ったって、５０回しかやっていない。小学校１年生から農業に関わりを持って一生を考えてみたら、すごい経験が始まっているっていうことだよね。

北原教育長
　検証はまだできていないんですけどね。今年、夏休みに向けて各学校ともいろんな計画を立てて、草取りのこと、水やりのこと、それから収穫が去年までだとかなり無駄にしてしまっていた。もったいないことをしてしまっていたということで、それに対して、持ち帰りをしましょうということや、さっきのようにご家族一緒にやるというようなことが計画されて、昨日、今日で夏休みが終了しますので、確認したいと思いますが、そうしたことの子どもたちの意識がどうだったのだろうということ。それから、水についても、新山のように「マイジョウロ」と言ってひとりひとつずつ持ってやっているというところで夏休み中はどうだったのかあたりを含め、お聞きしてみたいと思うんですが、長谷中は夏休みに収穫がかからないようにということで、あらかじめ工夫をしたということです。

白鳥市長
　すごいね。

北原教育長
　田んぼがどうなっているか、今年は８月１、２日の伊那まつりでっていうくらい、稲がぼんというくらい実りましたね。多分、各学校ともそうなっていると思うんですけど、子どもたちが、一斉に稲穂が出てくるっていうことについてものすごい驚きが

あると思うんです。トマトやキュウリが一斉に出てきちゃ困るんです。その瞬間を子ども達がどんなふうに捉えているのかいないのかっていうあたりも聞いてみたいと思います。

白鳥市長
　あと、先生たちの関わりっていうのは聞いていますか。先生たちがどういう、もうほったらかしになっているのか。

北原教育長
　学校によっては、職員が作業しましょうということで、そういうとことも計画にはあります。

松田教育委員長
　職員作業で、夏休みに１回とか２回、畑に行って草取りをすると、そういうことも大事だから、職員作業として位置付けてもらいたいと、全校やっているかどうかは知りませんけど、真摯にやっている学校もあります。

白鳥市長
　（１）の「子どもが学ぶ」ということ、教師の姿勢への問題提起、この辺りについて、ご意見をいただきたいと思いますが、どうでしょうか。

田畑教育委員
　委員長、素晴らしくよくまとめていただいて、目に見えるものがありまして、２ページ目の３の上のところなんですが、「先生が創って生徒は覚えるという関係」から脱することが、大きな「暮らしのなかの食」のテーマであって、この活動自体の支えは、教師の弛まぬ研究と修養が求められる。まさに、ここだと思うんですけど、横文字で文科省の方からいろんな要求が上がってきていまして､大きく叫ばれているのが、前にもお話ししましたがアクティブラーニングっていう横文字で、これはまた横文字かいってうんざりする部分もあるんですけど、訳すと、あらゆる能動的教育手法ということで、子どもたちが主役になって自ら学んで、その学びの場でお互い教え合ったりとかする教育手法、ひとつの技術ではあると思うんですが、いろんな教科で取り入れていくという方向性が示されている中で、やはり科目によっては難しかったりする部分があると思うんですけど、この「暮らしのなかの食」の授業展開を考えていった時には、いろんな意味で能動的な学習というのが繰り広げられていく場面になるという気がしておりまして、横文字で上段に構えなくても、こういった教育素材があることが、そういった子どもたちの能動的な学習というものに近づけていくのかなというふうに思っています。ちょっと子ども的に研究しておりまして、何で、アクティブラーニング、能動的教育が求められるのかというのがすごく大事でして、言葉とはぴんとつながらないのかもしれないんですが、細かく見て行くと授業の展開の中に共同体意識･共同体感覚｡この前教務主任の先生方との懇談のなかでも盛んに出されたのが、少人数のクラスに行くと関係性が固定化されるっていう話が何件か出ていまして、思い返してみれば自分も小学校の時にクラスの何人かでまとまりますとその中に序列ができて、ある意味そこでできた人間関係はなかなか崩せずに、ずーっとその関係を続けていくということがあると思うんですけど、例えば、勉強ができるとか運動ができ

るとか、ただ、農業というものに関しては、誰しもがリーダーになるチャンスが平等に与えられていて、小グループ化の流れの中で、例えば４人組で授業展開するような流れの中では、この４人のなかでは自分は水やり当番に手を挙げれば、「こりゃあリーダーになれるかもしれん。」っていうチャンスを与えられたり、「自分がおじいちゃんから教えてもらった技術をひとつみんなに語りかけて、みんなの役に立てることもあるんじゃないか。」とか、いろんなポジショニングの変化というものも、授業のなかで先生たちに工夫してもらうことで、あらゆる関係性が生まれてきて、必ずしも優秀でなければいけないとか、点数が高くなければいけないというものとは違った観点で、主役になったりフォローする立場に回れたり、いろんな立場の変化を経験する素材になったりするのかなと思いまして、単純に先生主導で畑仕事をやっていい作物を作りましょうっていう授業展開ではない、もっと違った作り方だとか、世話してみた感覚だとかを授業の中で引き上げてもらって、子どもたち同士が教え合ったり、経験した勘のようなものを伝え合うようなことが繰り広げられていくと、非常に生き生きとした、まさにアクティブラーニングの授業展開につながっていくんじゃないかなあと言えるような活動になっていくというのを、今日資料を見させていただいて感じました。

白鳥市長
　確かにそうだよね。経験しかないもんね。経験の厚さによってものができる。できないっていうことにつながっていくから､最初の方は失敗の繰り返しなんだろうけど、６年間またはプラス３年間を経ると、このことについては絶対の自信がありますよというふうにつながると思うんですよ。

田畑教育委員
　トマト名人だとか､きゅうり名人とかになるとすごくいいんじゃないかと思います。

白鳥市長
　ほかどうですかね。

宮脇教育委員長職務代理者
　抽象的な話になってしまうかもしれないんですが、私たちの、まさに５０代くらいの世代は、学生の頃一番いけなかったのは、農業を全然大事にしてこなかった世代だと思います｡同級生のなかでも自分が農業をやりたいなんて言う人は一人もいなくて、みんなだいたい工業系に行っちゃって、大きく我々の世代でいるんですけど、そこの世代の先生がいらっしゃって、そういう先生方も一緒に農業をやることによって、農業って本当は大事だったということに気が付いてもらいたいと思うし、多分気が付くと思うんですね。この前内山先生がいらっしゃった時にも校長先生の中から、例えば長谷の先生ですと、高齢者が多くなり、後継者がいない、中間層がいなくて教える人がいないんじゃないかとか、東小の小林校長先生ですと、この国は経済成長を目指してきたんだけどこのままでいいんだろうかと。これからの学校教育はこのままでいいんだろうか、そうした問題意識を先生方が持っているのが分かったので、そういうところまで掘り下げたところで、もう一回農業を考えてみる。組み上げてみるっていうことが、ひとつ大事なのかなと思いました。

白鳥市長
　確かに１次産業を軽んじていた時代っていうのがあるよね。そこら辺をそっくり置いておいた結末としてどうなったか、どうなっちゃうかっていうのは火を見るより明らかだからね。そこらへんに早く気が付いてリトライするっていうことが大事じゃないかっていう気がしますけどね。どうですか。

平澤教育委員
　それにつながるのかななんて気もするんですけど、３番目に提起していただいた「地域父兄も創る」再生への問題提起っていうところで、学校の先生に聞くと「農業は本当に分からない。トマトの作り方も知らない。」というような話なんですが、そういう先生が「トマトを作りたい。」と子どもが言った時に「頼ればいいじゃない。」って言うんだけど「どうやって頼ったらいいかわからない。」「どういうルートで頼ったらいいかわからない。」一度どこの先生だったかなと思うんですけど、「こんな応援ができますっていうリストをくれんかな。」っていうことを言った先生がいたんですけれども、やはり、何をどこへお願いしたら、「はい、やりましょう。」ってつながっていくか。この辺、信州型コミュニティ・スクールで取り込んでいる学校は割とうまくいくんですが、そうじゃない企画中のところは、どこへ声をかけていいか、どこから手を付けていいかというようなところ。たまたま、クラスのなかのおじいちゃんが上手だったから来て、「ああ、これはこうだって。あそこはこうだってって、○○ちゃんのおじいちゃんはすごいね。」とうまくいったところは、そのまま行くしっていう、ちょっとその取り掛かりのところを、こっちで指導した方がいいのか、学校でこんなことを応援できるっていうリストを出した方がいいのか、そこら辺のところを思いながら、もうちょっと、気楽にお互い遠慮なくできるといいなと思います。

白鳥市長
　そうですね。すぐに頼るということも、性格によるんだろうけど、まずどういうふうにやるんだろうと悩んでということをやってからでないと、いい答えは出ないんじゃないでしょうかね。

平澤教育委員
　そうですね。そこら辺も頼れない理由になるっていうか。「なんだ、何もしないで丸投げかい。」って言われたくないからやってみたいっていうか、そういう部分もあるような気がするんです。

松田教育委員長
　今の平澤委員さんのお話は、意見が分かれるところだと思うんですね。唐木順三先生の著書の中に講師の選び方、講師をどうやって選ぶかという話があるんですけど、全く誰を選んでいいかわからないっていう白紙の中で、選んでいくときにベースになるのは、自分がこういう話を聞きたいとか、こういう探究の仕方をしたいとかあって探していくと思うんですけで、そのベースを持っていて、自分で汗を流して探す。これが大事で、あてがわれたものでは、「ああそうですか。」っていう話になるんだけど、自分の求めた人を探し出すことができた時に、講師と自分がつながっていくと、先生は教えてくれているんですね。この農作業も、例えば、長谷なんかは皆さん農作業ができるんですよ。でも、ああいう純朴な人たちだから、自分から進んでどうって

いうことは言わないんだけど、働きかけていくと応えてくれるので、先生方が地域に足をきちっと据えて、教育をして欲しいっていうことは、あそこに止まって教育をして欲しいっていうこともあるんですけど、そうじゃなくって地域に入って行って、畑で働いているおばさんに声をかけて、「おばさん、僕たちの畑を見てもらえませんか。」とか、そういうふうにした時に初めてつながっていくんで、そういうことが一歩一歩大事にされていくことが、この活動を更に深めていくことになるんじゃないかと思うんですけどね。

白鳥市長
　そうですね。いろんな伸び代というか、枝の先が一杯あると思うんですね。さっき稲の話があったんですが、どうやって実になっていくのか、受粉をどうするのかという理科の話であったり、トマトに水を掛けると割れちゃいますよ。細胞の膨張率が何とかとか、いろいろな勉強につながっていくと思うので。それに加えて今の話だと、人間関係の醸成だったり苦手だったところが、トマトひとつで、自分が、先生が変わっていくかもしれない。そんなことがあるでしょうね。では、次の（二）のところを松田先生から話をしてください。

松田教育委員長
　ここに深い問題提起をされているんですけど、「今の社会は何か変だなと言う人は農場とのつながりを持ちたがる。人間が根本的なものを考えると農業につながる。日本中の人が、少し農業に関った経験をもっているという状況にしたい。」というふうに内山先生は提言されています。
　「人間が根本的なものを考えると農業につながる。」このことがとても大切だと思うんですけど、これは私が何度も何度も言っていることで、大変失礼で申し訳ないんですけど、唐木順三先生の「飛花落葉」にある問題提起が、ここに直接的につながると思います。『土を耕し、肥料をほどこし、種をまいて、それを大切に育て、みのらせ、とり入れる。そのとり入れたものでみづからを養い、来年の種を残す。そういう生き方が人間として上等な生き方だと思っているのである。四季のうつりかわりに順応して、天候風雨を気づかい、雑草をのぞき、病害虫をのぞき、気をくばって育てていく。いまのところでは、風水害はなお人力を超えた自然の猛威だから、天に祈り、地に伏して泣くことも起こる。そういうさまざまな経緯をたどって生きていく生き方、働き方が「文化」というものだ。そう思っているのである。』というふうに教えてくださっていますが、これが「人間が根本的なものを考えると農業につながる。」というところに私は直接的につながると思います。
　私は篤農家のおばさんに率直に聞いてみました。農業の良さとか感ずることを。そうしたら「いただくありがたさを感じる」（　）内は私の考察です。（命をいただく、生かされている自覚）だと思います。「自分で育てたものだから安心だ」と言いました。これは、（総合的な体験によりすべてが見える）。「きわめて新鮮だ」これは、（野菜本来の味の体感）。「日光や雨のありがたさを感じる」これは、（お天道様の自覚）だと思います。最後に「楽しい」これは、（「悟」の世界、生きる張り）だと思います。このおばさんの言われている一つひとつが「人間が根本的なものを考えると農業につながる。」というところにつながっていると思います。子どもたちも多分１年生から６年生まで、また、中学３年まで９年間やれば、おそらくおばさんと同じような感覚が身についていくというか、感得していくんじゃないかというふうに思い

ます。

白鳥市長
　なかなかいい言葉だし、深い言葉ですね。

松田教育委員長
　難しく言わずにやさしく言うからね。グサッと来る。

白鳥市長
　上等な生き方っていいなあ。農業っていうのは農業だけではなくて、それに結び付いてくる水だとか土だとかお天道様だとか、林業だって関係してくるし、いろんなところがないとできないですよね。どうですか、この（２）についてこんなところを足してみたいとかいうことはないですか。

宮脇教育委員長職務代理者
　うちの娘は医療系の学校へ行っていて、そこでパンフレットを配ってくれて、食と医学っていうのは根っこは一緒だって言って、その大学では食と医学を連携させるような活動を今後やっていきますっていうことで、実際ににやっているのが、獣医学もあるんですが、お医者さんになる人が、酪農の体験、農業をして医者になる。そんなような活動を始めているところがあって、やはりベースになるようなものができるんじゃないか、農業をやることによって。農業以外のことをするにつけても、農業で培ったベースになるものが、科学とかそういう方向でも活かせるんじゃないか。そういうことを感じるので､小っちゃいうちに一回農業を体験しておくのがいろんな方向で、役に立つかなという気がすごくしますね。

白鳥市長
　伊那にあるＫＯＡっていう会社、あそこは今全国から大学生が来るんだけど、真っ先にやらせるのが農業なんですね。果樹だとか稲作だとか、徹底的に新入社員には農業をやらせる。収穫体験をやらせる。そういうカリキュラムを組んで、あと、林業体験もきちんとやらせる。もう何十年も続いているんじゃないかな。そういう企業って最近増えてきていますよね｡伊那食も始めたりとかイナリサーチも始めたみたいだね。どうでしょうか。ほかに。

松田教育委員長
　今の職務代理さんの食についてですけど、美和診療所の岡部医師は、名医中の名医なんですけど、やはり東洋医学というものに対して大変関心が深い。口から入るというものの体内に及ぼす影響ですか、そういうものが極めて大きいという話をしていますので、やっぱり、食っていうのは体づくりの原点だと思うんですね。古いことわざにあるんですけど「病は口から入り禍は口から出る。」という教えがあるんですね。食べ物によって人間の体に大きな影響を与えるということを、この「暮らしのなかの食」を通じて、伊那市が感得していく。例えば、長谷中の子どもたちは葉物でもって給食をやっているでしょ。「これ、ものすごくうまい。」完食しちゃうんですよね。葉物を食べて。うちではあまり食べないんだけれど。まあ、学校で出るから勢いで食べちゃうということもあるんだろうけど、あの完食って、やっぱりこういうのってい

うのはうまいというのを、あの時期に感じたっていうのは生涯、食に対するものを左右していくんじゃないかと思いますね。

田畑教育委員
　今の話で、本当に朝飯がゼリーっていう高校生が増えているんですよね。

白鳥市長
　サプリメントっていうこと。

田畑教育委員
　「コンビニでチャージ１本、これでＯＫ」っていうＣＭをやっているじゃないですか。そうすると朝ごはんは食べずに自転車で出かけていって、コンビニで１本ゼリーを飲めば、ビタミンから全部摂れるっていう認識が出てくるし、実際ビタミンはサプリじゃないと摂れないと思っている子どもたちが出てきちゃうと思うので、口から入ったもので体が造られていくという感覚を、授業の中で先生たちが紐づけて伝えていってくれるというのが、食べ物で自分が造られているという感覚が大きいところだと思うんですよね。

白鳥市長
　今後、今週かな、慶応大学の学生たちがくるんだね、女子大生か。前に来た時に農家に行って野菜を畑で取って食べて、びっくりしたって、こんなにおいしいものなのかって。都会で食べているものと全然味が違うってね。その衝撃があって、今度仲間と何泊かして過ごすらしいんだけど、その本物、本当においしいものっていうのは体験しないと分からないので、僕自身が「暮らしのなかの食」にこだわっているのは、例えば、ジャンクフードみたいな、毎日ハンバーガー食べてコカ・コーラ飲んでっていうような生活をしていって、挙句の果てにこんなデブになって薬ばっかり飲んでいるっていう、しかも若いうちからね。そんな子どもたちを絶対この地域から生みたくないなっていう思いがひとつあるし、食っていうのがどんなに体を造るのに大事かっていうこと、バランスよく食べるっていうことがあるので、そうしたことが「暮らしのなかの食」を通じて、みんなでワイワイ囲んでうまいぞなんて食べたことのない、実は嫌いだったものを食べちゃうなんていうと、しめしめと思っているんだよね。

北原教育長
　先ほど医学と食っていう話もあったんですけど、昔は「トマトが赤くなると医者が青くなる。」って言いましたよね。ちょうどこの時期になってきたトマトを食することによって、今、いつでもトマトが食べられる状況なんですけど、子どもたちが作ることのできるトマトは今、この時のトマトしかないですね。そこへ来るまでに水であったり草であったり、病気であったり虫であったり、闘いながら、作る。そういうことを通して子どもたちは、本当に体を造るものができるという実感を持ってくると思うんですね。ここにある「農業に関った経験を持っているようにしたい」っていう尊さっていうのはそういうところにあって、こういうことをしていると本当にわずかなところからでも、例えば、東小学校では土地がなかったので、ベランダのここのところに、畑を作りましたし、伊那中も荒れ地を開墾しましたし、東小は今年駐車場みたいなうんと固いところをほじくってサツマイモの畑にしましたよね。そうして作って

いくことができるという経験を持っていると、土地は小さくても作物は作っていけるんだという知恵を持っていけるんじゃないかと思います。やはり困難を乗り越えていくことによって得られる、さっきのおばさんたちの感覚に近づいていく子どもたちが育っていくんじゃないかなと思います。

白鳥市長
　丸の内の地下で野菜を作っているっていう話。本当にいいんだろうかって、あれだけの設備をして、金かけて、しかも地下で光を当てて野菜を作ってそれが健康の元みたいなね。本来はお天道様の光で育つものじゃないのかって。で、一方で地方に行けば畑は荒れ放題。いくらでも作る場所はあるのにっていう、そういう矛盾が、いま、生まれているんですよね。そんなことも子どもたちに学んでいってもらえればなっていう気がするんですよね。本来お天道様があって作物ができるんだぞっていう、当たり前の、そういうのって僕のなかではすごく違和感があるんですよね。それをありがたがって、高いお金を出して食べている連中がいるっていうのは。

松田教育委員長
　この前の中学生サミット。長谷中の子供だったと思うけど、自分達でキュウリを育ててみてね、「スーパーで売っているまっすぐなキュウリ、こんなのできる。」と。大体丸かっちゃうって。だからそんなのを作るのは大変だっていう感じはあるんだろうけど、こんなの作るのはなんかおかしいんじゃないかという感覚も生まれたと思うんですよ。お天道様の下でできたキュウリは大概曲がっていると、それが普通だっていう認識になっていくことが大事なんですよね。まっすぐが普通だとちょっとずれちゃうんですよ。

白鳥市長
　どうですか。平澤さん。

平澤教育委員
　統計的な資料がないのであれなんですけれども、認知症になる人、土と関わらないとたちまちなる。すごく企業では優秀な人として働いていて、皆から信頼され、発言も行動力もあるのに、やめた途端、土と関わるということがなくなった途端に崩れていくっていうんですかね、そうしたり、ここに住んでいて、都会に住んでいる子どもたちのところに行った途端に、あれ、１か月もしないのにあの人こうだねっていうことが実際に起こっているんですよね。で、施設の大体のところで、農業作業じゃないですけれど、土と関わるスペースを持ったり時間を持ったりというようなことを試みているんです。この唐木順三先生のような高尚なことはないんですけれど、人間が生きていくうえで土と関わることがすごく大切なんじゃないか。それは、自然と思考力も生むだろうし、できたものを見て今言ったいろんなことを考えていく。もっといいものを作ってみたいと思ったり、そういうのを生んでいくんじゃないかって。で、やってないとなかなかやろうっていう気にならないけど、一度でも体験したことがあると、「この土地をこうして、ナス１本植えてみようかな。ひとりだから１本でいいや。」ナスとキュウリを植えてみようという気持ちが起こってくる。それは体験してあるからできるんじゃないかっていうことをこの頃、いろいろな病気の年寄りをみながら思うんですけどね。

白鳥市長
　「暮らしのなかの食」始まったばかりなんですけど、所期の目標も明確になっている中で、気が付かなかったこともおそらく見えてくると思うんですね。というのも子どもたちのアレルギーについてもしかしたら減ってくるかもしれないし、あるいは残食なんかについても、始める前と後でどういうふうに変わるかということもあるだろうし、好き嫌いもあるかもしれない。いろんなことをまた、教育委員会もそうだし、学校のなかでもそんなことをテーマに話をしてもらえれば、自分たちが当初考えてもいなかったような効果っていうのが、おそらくたくさん見えてくるんじゃないかと思うんですね。もともとやって当たり前だった農業というのを、子どものうちから関わりを持つことによってどういうふうに成長していくのか、どういう変化があるのかということを研究というか目を向けなくちゃいけないと思いますので、教育委員会の内部でも話し合ってもらうとまた見えるものがあるかもしれない。

松田教育委員長
　そのことにつながると思うんですけど、最初のところではちょっとお話しさせてもらいましたけど、子どもたちが先生に言われて書いてくるんじゃなくて、思わず書いた日記とか、そういうものの中に子どもたちの感じた本質が残っているんですよね。だから子どもたちの日記、生活記録を丹念に見て、そして、今話のあったアレルギーとか残食とか、好き嫌いとかたくさんあると思うんだけど、そういうものに気付いている子どもたちの感覚というのを取り上げて、学級にこういうことを感じている子どもがいるんだよと広げてやることによって、子どもたちの認識がうんと深まっていくのでね。この実践している記録を丹念に残していくっていうことが、「暮らしのなかの食」を伊那市の教育の重要な施策として後世に残していく重要な財産になっていく基になるので、それを怠らないで欲しいなと思うんですよね。その事実がないと教育論にならないです。

白鳥市長
　なるほどね。

田畑教育委員
　あと、悲しいかな、先生たちは県内異動で、３年とか６年で移っていってしまいますよね。で、この地域が、こういうことを教育の大きな主軸に据えていて、授業展開についても、まあ、あまり細かいところまでやると、そこで縛られてしまうと思うんですけど、自由度を持った中でも、農作業、実際の作業現場だけではなくて、それは何を作るっていう問題提起からどんな形で誰がどんな分担でやるのかを自主的にやるとか、さっきのところに戻っちゃうんですけど、「先生が創って生徒が覚える関係」から離れる最大のメリットは、先生たちに、まあほとんどの先生は教えられないと思うんですね。本来、学んだことを生徒に教えるっていう先生のスタイルから、「俺もわからないんだよね。」っていう立場に立った時に新しい授業が展開されるって思っていて、子どもと同じ目線で誰かに学ぶっていう先生の後ろ姿、子どもから見るとすごく魅力的に映ったりとか、先生があまりしゃしゃり出ずに生徒主導で動いていくところを後ろから、柔らかく包んでいく先生の後ろ姿がこの授業のなかで求められていますっていうことを、ここですごく熱く語るんですけど、現場の先生にどういうふう

に分かりやすく理解してもらうかということが、まさに委員長書いているんですけど、教育委員会としての支援として、お仕着せでなく、あそこに赴任したおかげで僕は教師として開眼したみたいな、そんな切り口になるような授業展開ができたらすごいなあという思いがあって、教師っていう既成概念を手放すチャンスみたいな。

白鳥市長
　確かにそういう機会は普段ではないわけなんだね。

田畑教育委員
　そんな捉え方をしてもらえると、やらされ感なく率先して研究していってもらえるといいかなと思います。

白鳥市長
　やっているうちに、いろんな気のつかないことが見えてきて、それがテーマになって研究していけば、面白い教育展開っていうか、伊那市の教育としてできるんじゃないかと思いますね。この間も中学生サミットの時か、話をしておもしろかったんだけど、子どもたちが腕を組んで、「あー雨が降らないかなあ。」なんていう会話をしたり、「そろそろ大根を蒔く時期かなあ。」なんていう会話をしたり、中学生たちが。これ、どんなにおもしろいだろうなと、そういうふうになるんだろうね。

松田教育委員長
　多分、子どもは今まで全く見えていなかったんだけど、畑仕事に関わることによって、おばさんたちが畑で種を蒔いていると、「種を蒔くのは大体春なんだけど今頃いったい何を蒔いているんだ。」とそういう気付きが起こると思うんです。学校へ来て「種を蒔いていた。」と、「いったい何を蒔いていたんだ。」「大根だ。」と、「大根って今蒔くのかい。」って、そういうふうにして、地域の皆さんの動きと子どもの動きがひとつになっていく。そういうことが必ず起こってくるんです。

白鳥市長
　トウモロコシも、僕も小っちゃいころ、なんでトウモロコシを１週間ごとに蒔くのかなあっておやじに聞いたら、「食べる時期に一斉にできたら困るじゃないか。」って、「そりゃあ、そうだなあ。大人って頭がいいなあ。」って思って。

北原教育長
　今の大根ですね、本当に今の時期、空模様を見ていて、この雨の前に耕して蒔こうと、この天気と一体となっていること。

松田教育委員長
　お天道様と一緒に暮らしているんだもん。

北原教育長
　そうしていながら、天変地異もあったりするんだけど、今日の仕事として草を取らなきゃいけないと、ここでやらなきゃいけない。ひょっとしたら、明日嵐が来るかもしれないけど、今日の仕事はやらなきゃいけないっていうお百姓さんの仕事。

松田教育委員長
　前、市長さんから大雨になって川が濁流になっている時に、おじいさんが田んぼを見に行ったと。そんな時に何で田んぼを見に行くんだと一般の人は言う訳だけど、おじいさんにしてみれば、田んぼだって自分と同じだもんで、一如の世界になっているでしょ。だから心配で心配で誰が止めたって見に行きたくなる。それがやっぱり篤農家、百姓だよ。百姓の姿ってそういうものだよ。

白鳥市長
　では、このことについては、１年を通じ、また、折々に現場を見に行ったりとか、１１月には内山先生がお見えになるので、そこで意見交換をしたりして、どんな子どもたちの発表になるのか、楽しみにしながら、段々進化していく姿を見てみたいと思います。次に（２）伊那市教育委員会運営方針に係るその他の取り組みについてお願いしたいと思います。事務局から説明をお願いします。

（２）伊那市教育委員会運営方針に係るその他の取組みについて
北野学校教育課長
　資料２、伊那市教育委員会運営方針であります。こちらにつきましては６月の第１回総合教育会議の際、教育委員会としての案を、市長と教育委員でご協議いただきました。諸々の修正を加えまして、６月の定例教育委員会で運営方針としてまとめたものでございます。まず、１番目として伊那市の教育理念がございます。２番目として伊那市の教育目標「歴史と文化を大切にした人を育むまちづくり」。これらを受けまして、２ページになりますが、３番目として本年度教育委員会の重要施策として、掲げているものでございます。この中にはこれまでご議論いただく中で、「暮らしのなかの食」の充実、キャリア教育の推進等も含まれておりますが、ほかの項目もございますので、ご協議いただければと思います。

白鳥市長
　前回出た話をまとめてもらってありますけれど、１番の「はじめに子どもありき」というこれは、伊那市の教育観の原点になるかと思いますが、２番として伊那市の教育目標「歴史と文化を大切にした人を育むまちづくり」、３番目には教育委員会の重要施策というふうになっております。まず、１番の「はじめに子どもありき」について、ご意見なりお話をいただければと思いますが、こういうことでしょうかね。

松田教育委員長
　（２）の「児童・生徒は無為にしてそこにいるのではない。たえず求め続けている存在である。」このことなんですけど、このことが端的に出たのが、この前の中学生サミットだと思います。前半は各学校の紹介なので、パワーポイントを見ながら原稿で紹介すると、そのあと伊那市の市政に対する問題提起をするっていうことで、話をするっていうことで、最初のうちは原稿を見ながら話をしていったんですが、トントントントン進んでいって時間が大分あるというときに、すごいなあと思ったのは、長谷中の久保田教頭がちょっと止めて、「学校ごとこの問題について意見交換しなさい。」と。自由に意見交換をして、そこから子どもたちの雰囲気がガラッと変わって、どんどんと自分の言葉で話し出した。やっぱり子どもっていうのはそういうものなので、

この「一問一答の授業から、児童・生徒の求めや願いに立った授業」をするっていうことはそういうことなので、もっと子どもを信頼してテーマを与えて、もし、立ち止まってしまったら、久保田教頭さんのように、「学校同士で話し合ったり、もう、慣れてきたら、長谷中と高遠中で意見交換して、そしてその意見をみんなのところで発表したらどう。」って、そういうふうにしていかないと、せっかく貴重な時間を取っても、授業っていうのは自己更新していく世界なので、その授業を通して、自分自身が何かを獲得したり、将来残るような、「あの時俺はこんな発言をしたなあ。」というようなものが残っていくようなものにしていかないと、貴重な時間なのでもったいないので、そういうことをこれからも是非大事にしていく伊那市の教育であってほしいなあと思います。

白鳥市長
　はい、１番についてほかにあればどうぞ。

白鳥市長
　では、次の伊那市の教育目標についてでありますが、「歴史と文化を大切にした人を育むまちづくり」であります。「学校教育にあっては、ジオパーク・エコパーク等、地域素材の教材化に努めることと、郷土愛を深めるためのキャリア教育等の充実が求められる。」と。このキャリア教育ですね。「社会教育にあっては、文化・芸術のさらなる振興を図るとともに市民が地域の歴史や文化を学ぶ機会を保証することが求められる。」で、スポーツ振興にあっては、ソフトボール、駅伝、山岳などが列記されています。こうしたことを具現化することによって、「歴史と文化を大切にした市民が育ち、市民の伊那市への帰属意識が一層高まることが期待できる。このことは、伊那市の教育行政が、伊那市の発展、充実に寄与する具体の姿と言える。」ということであります。この目標についてどうでしょうか。特に私としてはキャリア教育というところを大事にしたいなあと思っておりますので、ご意見をいただければと思いますが。

田畑教育委員
　ちょっと、キャリア教育担当みたいになっているところもあるんですけど、キャリア教育というと横文字で先生方からすると、「何これ。」っていう感覚を持ちやすいものかと思うんですけど、これ「生き様教育」っていう置き換えが自分のなかではすごくしっくりくるので、当然職業体験という現場の体験もその中ですごい大事ではあるんですけど、この地域に根付いてある意味覚悟を持って生きている大人の背中っていうものから､この地域で生きるっていうことはどういうことなんだろうということ。これは、リスクも問題点も包み隠さず子どもたちに伝えて、それを感じ取って自分の人生感に活かしてもらう。そういう部分っていうものをどれだけ大人が中学生に分かりやすい言葉で語りかけられるかっていうことを、大人が勉強しなくちゃいけないことだと思っていまして、できれば、企業で働いている人、雇われている人、全ての大人が、中学２年生の時私はこうだった。で、いろんな紆余曲折があって今、こういう思いで生きているっていうことを、伝える覚悟を持って子どもたちに話していく。何もこの地域に縛り付けるっていうことじゃなくて、この地域に生きていく自分の思いを発信していくことが、あらゆる意味で、情操教育も含めて影響が与えられていくんだろうなという思いがありまして、職場体験は体験として大事なんですけど、もう一

個、そこに根付いている人の生き様を吸収してもらえるようなプログラムっていうのが描かれていくとすごくいいなあと考えています。すごくこの地域は企業が協力する体制っていうのを後押ししているっていう面では、伊那市、上伊那っていうのは、県内でも珍しい力をもった地域だと信大の加藤教授もおっしゃっていたので、その辺をうまく活用して、この地域の魅力を含めて理解してもらえるような素地が造れたらいいなあと思います。

北原教育長

キャリアの関係は田畑委員さんにリードしていただいて、大きく充実してきたと思うのは、今話がありましたように、ただ職場体験学習だけではなくて、産学官の交流会であったり、夏休みに行われた夢大学であったり、ちょうど今、大学の加藤先生の話がありましたけれど、５月に行われた産学官交流会に「行ってみようといつものような会だろうと思って来たら、衝撃的、生涯こんなことは初めてだ。学び続ける姿勢にあったのは。」と。それは企画もそうですけど、そこに出てきた若手の実業家、酪農家であったり、美容室、それから機械関係であったり、こういった方々が本当に今言う生き様を伝えるんですね。それを参加者がどう感じたか、どう進めていくかということを主体的に考える時間にできたっていうことはすごいなあと思いますし、夏休みに行われた夢大学は、子ども達希望者なんですが、この間感想を見せていただいたんですが、「こんなすごい人たちが伊那市にはいるんだ。」と、社長さんであったり、先輩の話を聞いて、体験をしたりしたんですが、多くの子が中学３年生なんですけど、「来年も再来年も高校へ行ってもまた行きたい。」と言っているんです。是非そうした企画を広げていくことが大事かなあと、そうすると本当に自分の生き方を確立していくことができる。去年もこれに参加した子が、「私はこんなに書いたことがなかった。」普段これくらいしか書かない子がずーっと綿々と続けて書いてきて、学校の先生も驚いたんですけど、こういう出会いがあって自分の生き方を変えてしまう。そういう機会を今持っていただいていると思います。

白鳥市長

この夢大学、ちょうど太田国土交通大臣が来た時でしたので、偶然、ミルクで食事をとっている時に、がやがやがやがやしていて、「白鳥君、奥は何をやっているんですか。」「実は、上伊那の子どもたちがキャリア教育で」って言ったら、すっと立ち上がりさあーっと行ってそこで話を始めてくれて、「とてもいい所だ。日本の中心になって発展していく地域だから、みんな頑張れよ。」みたいなこと。あと、上伊那、伊那谷の経営者っていうのは非常に、モノづくりだとか後進の育成にうんと力を入れているところが多いので、来年の春できる長野県工科短期大学。あそこも企業の受け入れオールＯＫなんですね。いろんな企業で職場体験なり、いろんな最先端の機械がありますね。フライスだとかマシニングセンターだとかいろいろ。「いいですよ。いくらでも教えますよ。」と、だからここでうまくマッチングできれば、卒業したら、「うちに来い。」とか、「自分はあそこへ行きたい。」とか動いていくと思うし、工科短期大学はほぼ１００％県内就職になっているので、南信地域が９０％くらいと思うんですけど、そうした皆さんがこの地域を支えていく。そうした子どもたちが毎年４０人ずつ卒業していく。これ、非常に期待していますし、土壌があるっていうことですね、この地域は。あと３年後が非常に楽しみだということですね。どうでしょうか。ほかに。

松田教育委員長
　田畑委員さんがこの上伊那の企業は非常に子どもたちを温かく迎えてくれる。そういうものを持っていると言われたんですが、先日、サミットの時も上田から来た生徒とか、京都から来た生徒が実感としてそういうことを感じているという話をされましたよね。また、井上井月がこの地に３０年暮らしたというのもね。無関係ではないと思います。そういうものを何故、上伊那地域、伊那の地域が持っているのかということも、なんとなくそういうものだというんじゃなくて、もう少し、風土というか歴史が作ったとか発信していける。ただ温かいとかやさしいとかでなく。

白鳥市長
　それに加えるなら人がいいとか。

松田教育委員長
　人がいいのも何故人のいい人が出てくるかということを、何かがあると思うんですよ。

白鳥市長
　さりとて、世界に飛び出しているんですよ、企業は。世界を相手にして仕事をしている。日本中で仕事をしているし。人が良くて、お人よしでぼーっとしているんだけど、それだけではないというところも。

松田教育委員長
　やっぱり、私は２つのアルプスに囲まれて、世界的にも稀にみる景勝の地に暮らし続けているという、このことが大きな人間の懐の深さを作り出している原点だと思うんです。だからただ美しいだけじゃなくて、美しさがそうした人間性も育んでいるというところも大事にしたいと私は思うんです。

白鳥市長
　そういうことを教育委員会を通じて、学校、校長、教頭先生方にも、地域の皆さんからも子どもたちに、景観のことにしても、歴史感、文化のことも、「こんな所はないよ。こんないい所はないよ。」ということを常に発信し続けてもらいたいと思うんですね。「だからここで暮らしていきましょうね。もちろん世界もここから見えますよ。」と。そんなことを言っていかないと、子どもたちがこの地域に自信と誇りを持って暮らしていくということにつながっていかないと思うんですね。

松田教育委員長
　主観がうんとあるかもしれないんですけど、６年生の担任をしている頃、遺跡を訪ねて歩いたんですよね。共通していることは、遺跡のあるところは大体景勝の地なんです。山がきれいに見えたりとか。山並みが美しいとか。あるいは、広がりがきれいに見えたりとか、そういうところに先人も居を構えて暮らしていたんですよ。人間の本来持っている本性っていうのはそういうところがあるんじゃないですかね。元々上伊那の地はそういうものを持っているので、人のいい人間性を作り出すとかね。そういうことが言えるんじゃないかと思いますけどね。

平澤教育委員
　手良の成人式に出席しましたが、今年は出席者が９０％近くあったんです。あそこは人数が少ないもんですから、ひとりずつ意見を言う機会もあったんですが、みんなが、住んでいる人はそうですが、外へ出た人も出てみて初めて、「伊那は違う。」と、「機会があったら帰ってきたいけど、自分は将来こんなことをしたいので帰れないけど、自分の生まれたところは、あの手良であり伊那市であり、いいところだということがこれから困難を乗り越えられるような気がする。」とそんなような発言がいっぱいあって、集った住民が感激して、「このことを教育委員会で言ってくれ。」というくらい、区長さんなんかはもう「絶対言うんだぞ。」っていうくらい。そして最後は、今までと違って、自発的に歌を歌ってお礼をしましょうと新成人の人が合唱をしたんです。にわか作りの合唱でって言ったんですが、結構ハーモニーになっていて泣き出す人がいるくらい。何か温かさを感じて、それを外へ出てみて、なお感じたり、「ここにいる人もこんなところに戻ってこないことはないじゃないかと、成人式にはみんなで出ようよと、今年はつながりになった。」と是非、言ってくれと言われましたので、ご披露しました。

白鳥市長
　うれしいですよね。

松田教育委員長
　手良から見る仙丈は絶品ですから。あれだけ山を朝な夕なに見て、しかも時には、夕焼けも見たわけでしょう。それは敬虔になりますよ。知らず知らずのうちに。

平澤教育委員
　私も手良から仙丈じゃなくて、こちらを眺めて、ああ、こんなふうに見えるんだっていう、私は西に住んでいるので、東しか見ていなかったっていう。東から西を見るっていう経験をさせていただいてびっくりしました。

白鳥市長
　手良から見る仙丈は「独り仙丈」って言いまして、仙丈しか見えないんですよ。ああ、思い出したけど、あれ作ったよね。権兵衛トンネルから出たところから見た南アルプスのスケール、あの逆バージョンも是非作ってみたい。ユネスコエコパーク、世界遺産の担当の観光課か、あそこが担当で４年生以上の子どもたちに配ったんですよ。来年新４年生に配らなきゃならないし、南もいいんだけど、ユネスコエコパーク、ジオパークっていうことで南をやったんだけど、中央アルプスもみんな、なかなか名前を知らないので、そこら辺を考えてもらえないかと。今度、単価を安くできるように。高いんだよ。余分なことでしたが。じゃあ、時間もあれなので、次の教育委員会の重点施策であります。
　（１）は、総合教育会議を教育行政の政治的中立性、継続性、安定性、そうした内容であります。それから、伊那市学校給食食農体験事業であります。先ほど話しました。それから、幼保小連携、このこともここに掲げてあります。特に小学校に行く前の段階で、「暮らしのなかの食」にもつながってくると思うんですが、伊那市の保育園のなかでは、シンボルツリーを各園で設定して１年を通じて観察をする。しっかり

とみる。そういうことをやりましょうと。これは、絵を描いてもいいし、物語を作ってもいいし、落ち葉集めをしてもいいので、園ごとに「がるがるっ子」っていう実践を展開してます。これが小学校へ行って「暮らしのなかの食」につながっていくと思いますので、そんな幼保小連携ということに力を入れておりますので、この推進を重点施策に上げてあります。そして、「暮らしのなかの食」。生涯学習の推進、これは、「古い地名調査」「親孝行の讃歌事業」の充実等。６番については、創造館、生涯学習センター、伊那図書館、高遠町図書館等の館長の合同会議、また、捧課長を中心にこの連携を上手にしながら、それぞれの個性を引っ張り出していろいろな事業展開をやっていきましょうとそうしたことであります。で、スポーツ振興の充実。特に体力の低下が課題となっておりますけど、この地域の子どもたち、いろんなバランスも含め、運動能力の向上を図っていくように児童・生徒のスポーツ参加の推進を図っていきましょうと。それから、（８）が、「教育委員会」の活動の充実と発信。現地視察、自治区長、議会総務委員会との懇談、各館長との懇談、ＰＴＡ、そんなことが掲げてあります。これが平成２７年度の重点施策ということで、非常に内容の濃い、また、レベルの高いことでありますので、このことについて、また、補足等あればお願いしたいと思います。どうでしょうかね。

白鳥市長
　じゃあ、平成２７年度伊那市教育委員会の運営方針、こういう内容でもう実践しているわけですが、改めて確認していただきたいと思います。それでは（３）のその他に移りたいと思います。その他についての項目で何かありましたらお願いします。

（３）その他
白鳥市長
　私の方から、不登校の状況はどんなふうになっているのか、もし、全体として、小学生がどのくらいいて、中学生がいて、その数字は下がっているのか、伸びているのか。ここら辺が分かれば教えてください。後でもいいけど。それから、今年も中学校で学校登山がされたと思うんですけど、伊那市、それから、上伊那全体で消防署の職員がついて行っていると思います。そのことについてどんな状況だったのか、いいのか、よくないのかも含めてお話をいただければと思います。

北野学校教育課長
　昨年度初めてということでまとめてありますが、本年度に関してはまだまとめてありません。昨年の大きな反省事項を踏まえまして、一部で、消防署員が荷物持ちというようなこともありましたので、事前の校長会でもよくお願いをして、そうしたものでなく、本当に緊急時、生命・身体の危険に関わるということで、対応はできております。また、全校終了したところで検証してまいりたいと思います。

白鳥市長
　あと、不登校なんかはどうなの。

北原教育長
　２５年度までが、全体統計として出ているところでありますけれど、特に伊那市は全国と比較し高かったんですが、だいぶ下がってきまして、２５年度の段階では、小

中合わせると全国より下がってきています。特に中学生が大きく減少してきています。ちょっと数値を持っていないのでいけないんですが。

白鳥市長
　また後でもいいので、教えてもらえれば。この間も全然違う席で、たまたまあった人が「新山小学校って入れてもらえるのかい。」「あれはどこからでもいいぜ。」って言ったら、「うちの子のひとりが不登校になっちゃっているけど、あそこだったら行きたがるんじゃないかな。」なんて言うんで、いいんですよね。そういうのも。

北原教育長
　はい。実際に見ていただいて、そこで学びたいということになれば。これまでも実際に不登校だったお子さんが行って、素晴らしく活躍したということがございますので。

松田教育委員長
　〇〇小学校の〇の子。全然変わっちゃった。新山へきてから。ものすごい活躍して、〇〇や〇〇をやっている。（注；個人が特定されるおそれがあるため〇で表示）

北原教育長
　新山小の場合は、清掃が縦割りですから、来たその日から、ほとんど班長になるんです。〇年生の時に来た子ですけれど、夏休み明けに来てすぐ班長になって、最初の日からものを言わなければならない状況の中で、すごく活躍するようになったという例もあります。（注；個人が特定されるおそれがあるため〇で表示）

白鳥市長
　その他の項目で、どんなことでもいいのであれば。よろしいですか。

教育委員（なし）

白鳥市長
　はい。それでは、協議事項は以上とさせていただきます。

５　閉　　会
大住教育次長
　ありがとうございました。閉会とさせていただきますが、次回は、１０月２１日水曜日とさせていただきます。１０月になりますので、新年度予算あたりを中心にご協議いただければと思います。よろしくお願いいたします。以上を持ちまして第２回伊那市総合教育会議を閉じさせていただきます。